
とある世界の感染症 < パンデミック >

奏龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界の感染症＜パンデミック＞

【Nコード】

N1092Z

【作者名】

奏龍

【あらすじ】

とある青年、長谷川紅夜は学校の教室で外の景色を眺めていた。すると変な人影が目についた。その人影の正体は・・・！？
そしてその人影は紅夜の生きる世界にどのような影響を齎すのか！？

束の間の平和（前書き）

これが初投稿なので誤字脱字など変なところがあるかもしれません
が大目に見てください。

束の間の平和

2015年 5月上旬。

そろそろ暖かくなり始め、心地のいい風が吹き始める季節だ。

そんな中、青春時代真っ只中のある青年がいた。

その青年はとある学校で・・・

「ふうわあゝ・・・」

(5時限目の社会とか・・・マジないわあ・・・)

・・・などと欠伸をしながら内心で愚痴を吐いていた。

その青年の名は長谷川紅夜。

今年の4月に高校生になったばかりのピカピカの1年生だ。

高校の授業にも慣れ始め、欠伸などという余裕たっぷりなことをしている。

そういう時寝ないために決まって外の景色を眺める。(カーテンが閉まってるって寝る)

そして視界に入ってきたのは・・・カメムシ。

「ギヤアアアアアアアアア!! キョペー!!!」

思わず発狂。

「ん?どうした?長谷川。」

そう問いかけてくるのは只今社会の授業をしている塚本学。(通称まなぶ)

「い、いや。そこにカメムシが・・・。」

「「「!?!?!?!?!」」」

クラスの全員の注目が一斉に俺へと向く。

「みなのものー！ 至急この教室から退避せよ！」

そうやって指示を出したのは俺の親友であり学級委員長の前皇汰。

「『イエツサーー！』」

そしてクラスのみんな（+まなぶ）が速やかに退避・・・なんという正統率。

ここは田舎町な為クラスが1つしか無く、全員中学校からの知り合
いだ。

よって中学校でのこのクラスの決まりが未だに活きている。

それは・・・カメモシが発見された場合第一発見者が駆除する。・・・
・というものだ。（先生方からも了承済み）

発見したのをバレなきゃいいと思うかもしれないが・・・このクラスにカメモシを見て叫ばないやつはいない。

ガタン・・・ガサゴソ・・・バタン

掃除ロッカーから取り出した箒と塵取りで武装。

「おんどれカメムシめがああああ!!」

激闘の末、無事駆除に成功。

「みんなー無事駆除に成功した。万事オーケーだ。」

クラスのみんなが帰還。何事も無かったかのように授業が再開される。

「ふうわああ・・・」

またもや欠伸。今度はカメムシがないことを祈りながら外をみる。

どうやらカメムシはいないようだ。 (ふう) 安堵のため息。

すると校門を通り校舎に近づいてくる一人の人影が見えた。

(この学校に人が来るなんて珍しいな・・・ん？なんか妙にふらついてるな。)

しばらくすると「おい長谷川。またカメモシか？」と言われた。

「ああ、いえ。外を眺めながら少し考え事を・・・。」冷静に返答。

「そうか。ならいいんだ。」

(ええー。いいのかよ・・・。それって教師としてどうなのさ・・・。)

俺はさっきの人影をただの酔っ払いと思いそのままスルーした。

(ま、ただの酔っ払いなら後で教職員の誰かが注意しに行くだろ。

おっと、そろそろノートとらないと授業が終わっちゃう

う。)

キーンコーンカーンコーン

ノートも無事とり終わり5時限目終了のチャイムが鳴った。

「「「ふう〜やっと終わった」「」」

(クラス全員でハモるとは・・・恐ろしい・・・)

気持ちは分からんでもないが、まだ6時限目がる。(

そんな極普通(?)の高校生活を送っていた俺たち。

そんな平和な日常が数時間後には地獄のような世界に生まれ変わる
とは、誰一人おもわないだろう・・・。

束の間の平和（後書き）

ここまで読んでくださった皆様、誠にありがとうございます。
連載していくつもりなのでもしよかつたら今後ともよろしくお願
いします。

世界が変わった日（前書き）

これで2回目の投稿となります。
どうか温かい目で見守ってください。

世界が変わった日

キンコーンカーンコーン

6時限目始まりのチャイムが鳴る。

「「「はあゝあ。「「「

またもや全員でハモる。

(相変わらず息合ってるな。このクラス。これがもつとほかの事に活かされればいいんだが……。)

そして6時限目が始まってすぐのことだった。

「………やあ………ああ………」

微かに悲鳴のような声が聞こえた。

「ん?」

すると」「どうかしたか？長谷川。」

そうやってきたのは国語教師の米倉元樹（通称よね）

「今何か聞こえませんでした？」

「なんだー？ 誰か屁でもしたか？」

………衝撃の返答。

「チゲーヨ。」

思わずタメ口。

「なんかこう、悲鳴みたいな？」

「悲鳴？ そんなの聞こえなかったぞ。」

（先生もこうって言うてるし、他のクラスメイトにも反応はない…

・只の空耳・・・
だといいけどな・・・。

何故かそのとき俺の頭の中にあの酔っ払いの姿が浮かんだ。

(あれから酔っ払いの姿を見ていない。それなのに教職員が動かない・・・?)

さっきの悲鳴らしき声・・・クソッ、

嫌な予感しかしねえ！)

と、その時。

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ

学校の警報のベルがなった。

(チツ、予想道理・・・ってことかよ。)

『不審者らしき人物が校舎に侵入しました！生徒の皆さんは先生の指示に従って直ちに教室にバリケードを作ってください！繰り返し！繰り返します！生徒のみな・・・塚本先生！こんなところなにを！？・・・？塚本先生？一体なにを・・・？やめてください！やめ・・・うあああああああああ！』

「おい・・・今の何だよ？ どうして塚本先生が！？」

クラスメイトの一人がそんなことを言った。

だが俺はそんなこと気にも留めなかった・・・それは、外の光景が異常すぎて啞然としていたからだ。

「おい・・・みんな！ 外を見てみる！」

俺は思わず皆に叫び掛けた。

「おい・・・なんだよあれ・・・？」

「人が人を・・・襲っている・・・？」

「しかもなんだよ・・・あの数・・・。」

「おい皆！ 早くバリケードを！」

米倉先生がそんなことを言った。

「いや。ダメだ！」

俺は咄嗟に口を出した。

「どうしてだ!?!」

「おそらくこの学校に侵入している不審者もあいつ等と同じだろう。だとしたらここに留まるのはマズい。あの数に侵入されたらバリエードなんてすぐに破壊される。しかもここは3階だ。飛び降りて逃げることもできない。」

だからと言ってこのまま学校を出るのもマズい。」

「じゃあどうするっていうんだ!?!」

当然の疑問が返ってきた。

「武器を持って! こんな状況だし殴ったって正当防衛として認められるはずだ!

それと、単独行動は絶対にするな! 4、5人のグループを組むんだ!」

俺は自分でもわからないくらい冴えていた。

そして「皆！ここは紅夜の言うことに従おう！」と俺の言うことを理解してくれた皇汰が言った。

「クソッ！一体どうなってるんだよ……？」

みんなは困惑しつつも俺の言う通りに動いてくれた。

そして俺はクラスメイトの神前皇汰、蒼井龍二、音無奏美の四人で行動することになった。

「よし。まずは武器になりそうな物を探そう。」

そして掃除用ロッカーを開けた。

そこには……対カメムシ迎撃用の箒と塵取りがあった……。

「クソッ！こんなもの使い物になんねえ！探しにくいしかねえか。」

世界が変わった日（後書き）

読んでくださった皆さん、ありがとうございました。

誤字脱字、アドバイスなどがありましたらコメントよろしくお願ひします。

不定期になるかもしれませんが今後も連載していきますのでよろしくお願ひします。

`http://ncode.syosetu.com/n9332`

`y/`

`http://ncode.syosetu.com/n0485`

`z/`

このURLは同じ原作を基にして書いた人たちのURLです。

よかったらこちらにも目を通してみてください。

初めての殺人？（前書き）

もう3話目ですね。なんかもう定期的に投稿するのは面倒になったので投稿してしまいました。突然投稿遅くなる恐れがありますがご勘弁願います。

初めての殺人？

俺たちはあいつ等に遭わないように慎重に歩を進めていた。

「武器つつつても何があっかな？」

「やっぱりリーチは長いほうがいいよな。」

「それじゃああそこのモップなんて使えないかしら？」

「どつどつやって使った？」

「金属の接合部分をねじって千切るのよ。そうすれば先端が尖って
いざという時にも使えるわ。」

「なるほど。 んじゃさっそ・・・チツ！このタイミングで来るか
「！」

「どつどつする！？こつちに来るぞ！」

すると皇汰があいつに向かって歩き出した。

「おい!どうするつもりだ!?!」

「俺は少し武道には自信がある。足止めをするから今のうちに武器を頼む。」

「・・・分かった!無理はするなよ!」

俺たちはモップのあるほうに走った。

そしてモップの接合部をちぎり終わってすぐに・・・

「クソッ!なんだこの異常な握力は!?!」

「皇汰!大丈夫か!?!」

俺はモップで作った槍もどきをもって皇汰の方へ走った。

「ぐああああああ!」

(クソッ!このままじゃマズイ・・・!)

「うおおおおおっ!」

躓いた・・・。

そしてそれと同時に皇汰があいつを大きく蹴り飛ばした。

そして俺の手にしていた槍もどきの先端があいつの心臓部を通り貫通した。

「!?!うわっ!」

俺は慌てて槍もどきから手を離れた。

(俺は・・・人を殺してしまったのか・・・?)

そう思った矢先、あいつはこちらに振り返り襲い掛かってきた。

「!?!コイツ心臓を刺されてもまだ動けるのかっ!?!」

俺は転んだままの体勢で避けれず捕まってしまった。

そしてあいつは俺に噛み付こうとしてきた。

(やべえ・・・殺られる！)

俺は思わず目を瞑った。

ドスン！！

だがその後すぐに鈍い音が聞こえ、俺は目を開けた。

そうすると龍二がもう一本の槍もどきであいつの頭部を強打している姿があった。

そしてそいつは力なく床に崩れ落ちていった。

初めての殺人？（後書き）

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございます！
こんな小説ですが、どうか次話の方もよろしくお願いします。

下の方に友が書いた小説のURL貼りますんで、よかったら見てくださいな。

<http://ncode.syosetu.com/n1085>

z / 京谷

<http://ncode.syosetu.com/n9332>

y / 柊

明かされていく正体（前書き）

不定期で申し訳ありません・・・4話目ですん。
もしよかったら感想、評価などの方もよろしく願います。

明かされていく正体

「・・・やった、のか？」

「ああ、どうやら完全に動かなくなったようだ。」

「ふう〜とりあえず助かった。サンキューな龍二。」

「あー、なんだ、当然のことはただけだ。それにしても・・・。

「・・・こいつらは一体何なのか？」

「心臓を刺しても・・・死ななかったわよね？」

「これはあくまでも俺の推測だが・・・あいつは既に死んでいたんだと思う。」

「「はあ!?!」「そ、そんなことって・・・?」

俺と龍二はキレイにハモった。奏美は”さすが女の子” と言った

ところか。

「俺はあいつに掴み掛かれたとき抵抗するためにあいつの腕をつかんだんだ……」

だが、あいつには脈がなかった。そして何より、心臓を貫いても倒れず、

頭部にダメージを与えることによって無力化出来た……

それとも一つ、あいつ等はやたらと噛み付きたがってくる。

知識があるとも思えない。たぶん、本能の一種だろう。」

「あいつ”等”ってことは他のヤツもそうなのか？」

「ああ、教室で外のあいつらを見たときも噛み付いていたからな。

そしてその噛み付く意味だが、奴等に噛まれた者は奴等になる。

そうやって仲間を増やしていくんだろう。 感染病みたいなものだな。」

(しかし、あんな状況で冷静にあいつ等を観察し、分析して誰でも納得出来るように)

文を構成し論じる。 中学校からの付き合いだが、相変わらずス

ゲエな……)

「そ、それじゃあまるでゾンビみたいじゃない!？」

「俺らが知ってるものとして、それが一番近い存在だろうな。」

「そ、そんな……。」

とても信じがたいことだが、いまはそう考えるのが妥当だろう。

「あいつらはもう人間じゃない……それならなんの躊躇もなく攻撃してもよさそうだな。」

「ああ。 そうしないとこちらの命が危ないからな。」

俺たちが今後の対策を考えていると、俺の目にとんでもない光景が映った。

「……おいおい、マジかよ。」

「どうした？紅夜。」

そう言って皇夜は俺の視線の方へ向いた。

「ッ!! なんだ……あの数は……。」

皇夜につられて2人も俺の視線の方へ向いた。

「「嘘・・・でしょ〔だろ〕？」」

俺たちが見たのは20m程先からこちらにゆっくりと近づいてくる大勢のあいつらの姿だった。

「クソッ！ 後ろにはいけねえぞ！・・・やるしかねえのか・・・。」

すると俺は皇汰に肩をつかまれた。

「まで紅夜。あの数を一体どうするつもりだ？」

「そんなこと言ったって・・・他にどうしろってんだよっ！？」

「今思い出したんだが、さっき言い忘れたことがある。

あいつ等は目が見えず音にだけ反応習性がある・・・はず。」

「”はず”ってお前・・・。」

「俺だって実際に試したわけじゃない。だが、あいつらの行動を見る限り、

その可能性は高いだろう。」

「クソッ……どの道それしか方法はねえか……。」

「そついでことだ。」

明かされていく正体（後書き）

私目の小説は展開が遅い気がします・・・。

たぶんこれからもこんな展開スピードだと思われます（＝・・・

、＝）

そんな私目の小説をこれからもよろしくお願いしますm（「「

m

新たな仲間（前書き）

4話との間が結構空いてしまった・・・。 申し訳ない。
こんな僕ですがこれからもよろしくお願いします！><

新たな仲間

俺たちは近くにあつた花瓶を教室の中にあるロッカーに投げつけた。

パライイン ガシヤアアン

すると、あいつ等は一斉に音のした教室へと向かって歩き始めた。

「よし。なんとか成功したな。」

「これからはなるべく音をたてずに行動するぞ。」

俺たちはあいつ等のいないところで今後について話し合っていた。

「やっぱり武器は全員分ほしいところだな。」

「頭が弱点だとすると打撃系の武器がよさそうだ。」

「遠距離系の武器もほしいところだ。銃とか。」

「「「……………」」」

「軍オタキター」

「でも遠距離つつつても簡単に手に入れられないだろ。」

「俺の家にガス式の釘打ち機がある!」

「家まではどうやって行く?」

「…………車なら運転できる)・、ー・、(」

「ドヤ顔はさて置き、確かに援護射撃者はいても損はないな。」

「となると先ずは車の入手だな。」

「よし。鍵なら職員室にあるはずだ。まずは全員の武器を手に入れ
てから職員室に向かおう。」

俺たちは動き回るのを避けるため、武器はモップで作った槍もどきで統一させた。

途中途中あいつ等を無力化していきながらなんとか職員室前まで来ることが出来た。

すると職員室の中から

「ウギヤアアアアアアアア!!」

という叫び声が聞こえた。

「マズいっ! いそぐぞ!」

その声を聞き俺たちは急いで職員室へ突入した。

「おい!大丈夫か!?!」

「紅夜じゃない!」

「すまねえがこの有様だ助太刀頼む!」

職員室にいたのはクラスメイトの篠崎美香と銀真人だった。

「篠崎と真人はこいつ等の弱点分かるか？」

「ああ、頭だろ！」

「オーケー。そんじゃあいくぞ！」

「了解」

数は相当多かったがお互い助け合いながらなんとか排除できた。

「はあ、はあ。それにしても随分数が多かったな。」

「おそらく俺たちと同じ考えの奴等、教職員に助けを求めに来た奴等が集まったんだろ。」

「そういえば紅夜達はどうして職員室に？」

「ああ、車の鍵を取りに来たんだ。」

「なんだあ、私達と同じじゃない。」

「それにしても助かった。」

「気にすんな。　　そういえばお前達は景子と俊介とチーム組んでたよな？」

「ああ……。　　景子は職員室に来る途中、俊介はさっき職員室でやられちゃった……。」

「そうだったか……。　　こんなこと聞いてすまなかった。」

「……こんな状況だ。　　しかたないさ。」

「」「」「」「」「」「」「」

「ねえ、美香達も私達と一緒に行動しない？」

「え？」

「そうだな。教室にいたときは状況が違っし、仲間は多いほうがいいな。」

「いいのか？」

「遠慮すんな。皇汰の言っとおり仲間は多いほうがいいからな。」

「そういうことなら同行させてもらっよ。」

俺達は新しく銀真人、篠崎美香と仲間になった。

新たな仲間（後書き）

ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございます！よかったら感想、評価などもお願ひします！

脱出！（前書き）

今回は割りと早めに投稿できました^^
これからも派早く投稿できるように努力します！

脱出！

「この人数だと車は大きい方がいいな。」

「それならまなぶのワンボックスカーが良さそうだ。」

「まなぶの机は…っと、あそこか。」

ジジジジジーー ガサゴソ チャリン

まなぶのバッグから鍵を取り出した。

「よし。早速駐車場に行くか。」

廊下にはそれ程あいつ等がいなかったので外には簡単に出られた。

だが外の状況は違った。

「結構いるな。」

「音を立てずに駐車場に行くぞ。」

駐車場にも結構の数がいた。

「さすがに駐車場の敵は倒さないとな。」

「よし！お互い助け合いながら殲滅するんだ！」

「了解！」「」

俺達は自慢のチームワークを活かし、怪我人もなくあいつ等を全滅させることが出来た。

「ハア・・・ハア・・・なんとかなつたな。」

「よし。新しいあいつ等が来る前にここを出よう。」

俺達はまなぶの車に乗り込んだ。

「龍二お前本当に大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題ない。」

「なんか余計心配になってきたわ……。。」

ガチャ（鍵を挿す音）　ブウウン・・・ブンブンブンブン・・・
（エンジン音）

「使い方は大体同じか。　よっしゃあ！いくぜー！」

（（ごくり））

ガン！（車がぶつかる音）　「」「」うおっ！」「」「　「」「キ
ヤアー！」「」

「おいテメエ！早速ぶつけてんじゃねえか！」

「すまん・・・アクセルとブレーキ間違えた・・・??　?? ??
！」

（もう一回

だ！）

「?? ????」

(本当に大丈夫か?)

「???? . ?? ??」

(大丈夫だ。問題ない。)

「その言葉を信じよう。」

「紅夜と龍二はさっきから何喋ってるの?」

「「「ふっ」」」

「なによそれー。腹立つ。」

「馬鹿二人はほっとけ。」

「「んだデメエー!」」

「ハモってないでさっさと出発しろ。エンジン音に近づいてきたぞ。」

「ケッ」「

「あいつ等は轢き殺してもいいが、横転しないように頼む。」

「了解。 んじゃいくぞ！」

ドオン！ドタドタドタドタ

俺達をあいつ等轢き殺しながら道路に出た。

「燃料も満タンだし、このまま俺の家に向かう。」

走ること10分

「よしついた。 紅夜、門開けてきてくれ。 これ鍵ね。」

龍二の家は都会に行ってもなかなか見れないような豪邸に住んでいる。

ガチャ ガラガラガラガラガラガ

ブウウン ガチャ バタンッ

「龍二の家ってこんな豪華だったんだあ」

「私も初めて来たわ。」

「俺達は何回か来たことあるけどな。」

「そっいや、もう夕方か。ここなら安全そうだし、今日はここに泊まるか。」

「そっだな。今日は疲れたし、明日に備えてゆっくり休むか。」

脱出！（後書き）

ここまで読んでくださった方々ありがとうございました！
これからもよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1092z/>

とある世界の感染症<パンデミック>

2011年12月15日16時46分発行